

『いつもどおり』

山名美穂

6,370 文字

あらすじ： ふたりの幼い子を持つ主婦の詩織は、家の汚れを指摘した夫と大ゲンカになる。夜中にひとり酒を飲みながら、家族のための掃除だけで過ぎていく毎日を嘆いていると、長子が昔作った、壁の消えない染み「壁神様」が声をかけてきて…。(107 文字)

「今日も詩乃がずっと離れてくれなくて、ほんと困った」

そう言いながら、わたしは着席した夫の前に、食事を並べた。

「あの子、ほんとにママっ子。おまけに勇太がさあ」

夫は、彰は、箸を持ったままダイニングテーブルに肘をついて、だるそうに座っている。

「…ねえ？聞いている？」

のぞき込んだ顔には仕事の疲れが貼りついていて、表情は険しい。

「テーブルの上、なんか汚い。なにこれ」

彰はそうつぶやきながら、肘で汁椀の下あたりに広がった黒い汚れをこすった。

「鉛筆の黒いのがついてるの。勇太が、ここで宿題するから。低学年のうちはリビング学習って言ったでしょ」

「ここリビングじゃねえし」

「リビングのテーブルじゃ高さが…」

「どっちでもいいよ、拭いといてよ。詩乃もここで飯食うんだろ？手づかみで。汚いじゃん」

わたしの鼻は不満の息を漏らした。

「それになんか床もベタベタする」

夫はそう言って左足を、床で小さく上下させた。

「だから、詩乃のイヤイヤがひどくて、毎回毎回ご飯をこぼされるから」

「後で拭けよ」

「だ、か、ら、」

ああ、出た出た。夫婦間の緊張が高まっていくのを互いに感じながら、どうしようもないパターンのやつだ。

「わたしから離れてくれないから、きれいに拭いてる暇なんてないんだってば。さっき言ったでしょ。聞いているの？」

嫌そうに顔をしかめたままの彰は、皿の上のポークチャップをつつく。

「だいたい、いつ話しかけてもちゃんと返事もしないじゃない。ねえ、わたしの話聞いているの？」

「うるせえな！」

そう怒鳴ると同時に、彰はテーブルの上に箸を投げつけながら勢いよく立った。ガタン、ガシャン、と、いろいろな大きな音がして、皿の上からおかずが飛び、味噌汁が床にこぼれた。

「仕事で疲れてるんだよ。それをいつもいつも帰ったと同時に責めるみたいにしゃべりやがって。オレは疲れてるの。家に帰った時くらい休みたいの。ホッとしたいの。聞けるわけないだろ、そんな時に。分かれよ」

彼が声を荒げるのは、珍しい。わたしの心臓はバクバクと大きく動いて、足もすくんだが、口から出たことばは、とても冷静だった。

「大声を出さないで。大きな音も。勇太や詩乃が起きる」

「なんだよ！ムカつくな！」

「やめて。子どもが見たら不安に思うじゃない」

それくらい分かってよ。なんだよ、ムカつくな。

わたしの結婚相手は、妻をにらみつけて、ドスドスと大きな足音を立てながら風呂場へ向かった。上がったら寝室に直行して寝てしまうだろう。

わたしはテーブルの上の、散らかった食事を片付け始めた。最悪。ポークチャップのケチャップソースが、壁紙にまで飛んでいる。ウェットティッシュや台拭きでこすってみたが、オレンジ色の染みは取れなかった。諦めて食器を集めて、食卓を拭く。力を入れても、勇太の鉛筆の黒い跡まではなかなか取れない。住居用洗剤をスプレーすればいいのだけど、今はそこまでできる気がしない。床まで流れた味噌汁は片付けなくては。

彰のたつての希望で、オプション追加した鏡面仕上げのフローリングフロア。毎日子どもがいろいろなものをこぼすから、いつの間にかずいぶんくすんでしまった。まあ、今日一番盛大にこぼしたのは夫だけだ。

「フン」

今度は嘲笑の息が鼻から出た。

あらかた物が片付いた後、手を洗って、わたしは冷蔵庫の野菜室の奥にしまっていた、シャンパンのボトルを取り出した。

いつ飲もうと思ってたんだっけ？

彰の誕生日とか、結婚記念日とか、そういうときのサプライズにと、こっそり買ったシャンパン。ふたりのなにかを祝う雰囲気もないまま、ずっと放置されていた。

普段は座ることのないソファに腰かけ、これもだいたいぶへたってしまったな、と思う。平日は子どものトランポリンとなり、休日は夫のデイ・ベッドとしてこき使われてきたのだ。いたしかたない。

引き出物でもらったグラスで何杯目かのシャンパンを飲みながら、ふと左手の壁を見た。そこにある、薄い、でも大きな染みと目が合う。

目が、合う。

浮き上がったお化けの顔みたいな形のそれは、勇太がまだ赤ん坊のころにできたものだ。授乳後「げっぷ」がうまく出せなかった彼は、しばらくして突然、盛大に飲んだ母乳を嘔吐した。それは噴水のようにすごい勢いで、軽く1～2mは跳び、新築の真新しい壁に、消えない染みを作った。当時はそんなことどうでもよくて、ただその嘔吐にびっくりして、夜だったけど彰と一緒に、勇太を診てくれる病院がないか電話をかけまくった。結局どこかの看護師に受話器越しに諭されて、そのまま終わったんだっけ。壁に残った、ムクの叫びのような不吉な染みを見るたび思い出す。

今思えば、単なる乳児あるあるである。でもそんなこと知らなかったから、なにか病気にでもかかったのかと、ふたりで右往左往した。うん、なにかにつけてふたりで右往左往していた。

「今じゃなによ」

もう幼児になったとはいえ、妹の詩乃については、ずっとわたしひとりで面倒を見ている。

彰の仕事が忙しくなるタイミングと、詩乃の誕生が重なったのは分かっている。仕事が忙しくなることの意味も理解しているつもりだ。分かっている。詩乃だって分かっているからちっともパパに懐かなくて、いつまでもママ、ママとわたしにまわりつくのだ。それを見た勇太がやきもちを焼いて、妹に意地悪をする。勇太だってまだ小学校 1 年生で、周りの環境にも慣れていない。子どもなのだ、仕方がない。詩乃のこぼす食事、勇太が汚す服、ふたりが散らかす部屋。仕方がない、子どもなんだから。

ところが夫ときたらなんだ。

朝は眠い、昼は仕事、夜は疲れた。土日はソファで寝てばかり。せめて寝室で寝ろよ。汚い、掃除しろと小姑のように言うくせに、今日はちゃぶ台返し。絶対に落ちないケチャップの染みを作ってくれた。

バン！

わたしはソファの上のクッションを壁に向かって投げた。

バン！

手元にあった、読む暇のない雑誌や、彰のビジネス書、新聞、詩乃のパペット、勇太の鉛筆。結構あるな、片付けきれなかった物が。

バン！バン！

投げながらわたしは気づいている。やみくもに投げているわけではなくて、頭の中で計算して物を飛ばしているのだ。

テレビに当たって、倒れないように。写真立てに当たって、落ちて割れないように。シャンパンをカーテンにぶちまけるようなこともしない。

なぜか？

片付けるのはわたしだから。

「うわあ！」

わたしは叫んで、頭を抱えた。長らく美容院にも行っていない髪は、伸びて傷み、風呂上がりの湿気をまだ含んでいて、ごわついている。

「もうやだ！マジでやだ！死にたい！うわあああ！」

「どう、どう。しーちゃん」

妙にファンシーでアニメチックな声に、わたしは涙と鼻水だらけの顔をあげる。

「落ち着いてよ、聞くから」

そこには母乳の、お化け顔の染みがいた。

「ふはは」

わたしは思わず笑った。笑いながら、グラスに酒を注ぐ。あらなんだかずいぶん中身が減ったのね。

「壁がしゃべってる。誰、あんた。壁？」

「うーん、神様かな」

「かみさま？ 壁紙の紙？ 紙様？ マジうける」

「うーん、この際それでもいいや」

わたしはパジャマの袖で、涙をぬぐい、手の甲で流れ出る鼻水を拭いた。

「あのね、しーちゃん」

しーちゃんは、わたしのニックネームだ。詩織、だからしーちゃん。でも詩乃が産まれて、その愛称は彼女の手に移りつつある。事実夫になった彰は、わたしのことをしーちゃんと呼ばなくなり、機嫌のよいときに限り詩乃をそう呼ぶ。

「しーちゃん、世の中にはね、成長に必要な痛みや傷がある」

「意味が分からない」

うっすらと浮かび上がる染みに感情のない声で返す。うーん、と紙様は唇をすぼめる。

「あなたが今見ているものは、新築の壁についての忌々しい汚れだと思ってる？」

少し考えてから、首を左右に振った。

「勇太君がつけた汚れだけでも、あなたたちが親としての経験値を上げるために、必要なアクシデントの跡だと理解してるでしょ」

なにも考えずに、うなづく。

「だからね、しーちゃん。しーちゃんも、暴れて汚していいんだよ」

「意味わかんない！」

わたしは怒鳴った。

『だから』っていう接続詞の意味が分からない！」

途切れかけた涙と鼻水が、再びあふれてくる。

「どうして彰はわたしの話を聞かないの？ 聞いても理解しないの？ 理解しようもしないの？ どうして詩乃はわざわざ皿をひっくり返すの？ どうして勇太は片づけができないの？ どうして彰まで暴れて汚すの？ わたしばかりがみんなの尻ぬぐいをして、掃除で毎日が終わっていく。ううん、終わってないから彰が怒るんでしょうね。でもムリ、もうムリ。こうやってわたしが暴れて家をぐちゃぐちゃにしたところで、誰が片付けてくれるのよ？ 自分でやるのよ。後で冷静になって、すごくむなしい気持ちで。誰も大変だったねって、辛いよねって分かってくれる人なんかいないんだからわーん！」

壁紙様は黙っている。

「いやだ、いやだ、理解者のいないこんな家。ひとりになりたい。自由になりたい」

号泣しながら、わたしはわめいた。

「しーちゃんの言ってることは、すごく正しいんだよ」

やっぱりちょっと声がアニメっぽくて、そっちに気を取られる。

「自分が身を粉にして、時間も気持ちも、全部自分を削って、家族のことを優先させて毎日働いてる。しーちゃんは偉いんだよ、すごいんだよ」

「でも誰にも評価されないじゃない。お金にもならないし、お礼のことばひとつだって誰からも言われたいし、わたしの人生なんのためにあるのかぜんっぜんわかんない」

「そう思うよね」

わたしの嗚咽。

「しーちゃんの言ってることは正しいんだ。でもさ、それをいちいち誰かに理解してもらわないと、誰かに了解してもらわないと、自分は自由にしちゃいけないんだと思ってない？休んじやいけないと思ってない？」

嗚咽。

「昔から、しーちゃんは真面目で律儀なんだよ。夫と話して、理解し合って協力しなくちゃって思ってる。でもそんな話し合い、まともに終わらないのが現実じゃない。世の中そうゆうもんでしょ。理解なんてなかなかされない。そもそも、されなくていい。誰かに分からせようと一生懸命にならなくてもいいんだよ」

「わたし、どうしたらいいの？やっぱりよく分かんない」

認めてくれたのは、分かるけど。

「つまり、ひとりシャンパーニュ万歳」

わたしは再び、シャンパングラスと向き合う。適温を過ぎた黄金色の液体の中で小さな泡がまだはじけている。

「記念日だとか、誰のためとか、理由いらないから。好きに買って、好きに飲みなよ」

「でも子どもが、今、突然病気になったら」

「夫たたき起こして、タクレ」

わたしは唇をかんだ。

「いくら予想して伏線を張ったところで、予想外の動きをするのが子どもじゃない。想定外のことが起こるのが子育てじゃない。なにが起こるかなんて世界的レベルでナゾ」

「それはわかるけど」

「起こってから考えればいいよ。なにも廃人になるまで毎日飲むわけじゃなし」

「うう」

「自由は勝ち取るものです。やっちゃったもん勝ちです」

「かみさまああああ！うわーん」

わたしは顔を両手で覆って泣き始めた。紙様は黙ってそれを見ていた。

ひとしきり泣いたところで、わたしは壁に問うた。

「ねえ、もうなんか疲れちゃった。眠い。どうしよう」

「うん、うん。頑張ったから、疲れたんだよ。疲れたら、休むんだよ。寝なさい」

言われるままずるずると、床に体を倒れこませて目を閉じた。心なしかペタペタしている

ような、そうでもないような、フローリングの冷たい床が、熱くなった頬を冷やして気持ちがいい。

「かみさま…、ひとりシャンパーニュ万歳…」

ドスドスドス。

聞きなれた足音がする。わたしは薄目を開けて、大きな足が近づいてくるのをぼんやりと見ている。

ああ、きっと蹴られるな。うるさかったんだ。また怒られるんだ。初めて暴力を受けるんだ。

せめてもの防御として、両手で顔をガードし、お腹を丸める姿勢を取ってみる。

「詩織」

すると意外に柔らかい声が降ってくる。

「しー、しーちゃん。大丈夫？」

夫がわたしを呼んでいる。少し待っても、蹴られないみたいなので、顔の前の手を解いて彰を見上げた。

「すごい音が聞こえて、声とか…。それで急に静かになったから…」

彰の表情は不自然にこわばっているが、食事をひっくり返した時とは、違うように見えた。半分眠ったままの娘を片手で抱いて立つ夫の後ろに、小さな体が見え隠れする。

「勇太」

「ママ」

不安と恐怖がマックスに達した表情の息子だが、意外にもまだ泣いていない。強くなったな。

「起きちゃったのね。ごめん。大丈夫、寝よう」

勇太は父親のスウェットの端っこをつかんで、言う。

「パパも」

「パパは、片付けてから行くから」

「パパも、一緒に。ママも」

「でも」

「とりあえず寝よう、みんなで寝室行こ」

わたしはゆっくり体を起こす。彰は

「分かった。みんなが寝たら、オレが片付けてくから」

そう言って、わたしに左手を伸ばした。

そして案の定、夫は寝室に着くと、家族の誰よりも早くぐっすりと眠ってしまった。

朝は特に忙しい。食べ物で遊びながら、わたしを独占しようとする詩乃がイスから落ち

ないように常に監視、同時に学校に遅れないように勇太のアシストをする。ついでに夫。

「ママ、水筒がない」

「え？今言う？そういえばどこ？昨日持って帰ってきたっけ？」

「うーん、分かんない」

「ええええー。多分学校に置いてきたんだよ。待って、幼稚園の時使ってたやつが…」

「ママー、ブドウ、ブドウ食べるのー」

「待って、詩乃」

ドスドスドス。

彰は本当に歩く音がうるさい。戸建てで正解だった。

「おはよう」

リビングの入り口で立ち止まったスーツ姿の彼に、声をかけた。

彰が見ているリビングに、もう本やクッションは散らかっていない。当然だ。主婦を舐めてはいけない。

「あの、詩織」

「なに？コーヒー冷めるよ。勇太の水筒、水筒よね」

「しーちゃん！」

「なに！」

「…ごめん」

「…」

勇太が、父親と母親の顔を交互に見る。勇太はまずわたしに抱きつき、それから彰に抱きついた。

「ママ、今日、水筒いらない。学校の水道で飲む」

「ええええー。それはいいけど、間違っただよりの水筒の中身、飲まないでね」

「分かった！」

「あなたも、時間」

「パパ、一緒に行こう」

彰は少しぬるまったコーヒーを立ったまま一気に飲んで、

「寝坊したから、行くわ」

と言った。

「パパ、一緒に行ける？」

「行けるから、早く用意しろよ、勇太」

バタバタと出かけていくふたりを見送って、リビングに戻ると、詩乃が床に落ちたブドウの前で、座り込んで泣いていた。

「ママ、ブドウ、ブドウ」

彼女の小さな手で弄ばれたいくつかの巨峰の粒は、皮ごとぐちゃぐちゃになって、床に散らばっている。

「あらあら」

わたしは雑巾と洗剤の入ったスプレーを持ってきて、汚れた床を片付けた。きれいになったフローリングフロアの上に、娘の涙がぼたぼたとこぼれる。

「ごめんなしゃい」

「ごめんごめん、ブドウ、食べたかったんだよね」

雑巾を持っていない方の手で、彼女の頬をぬぐった。

「大丈夫よ。ママ、お掃除得意だから」

床にへたりこんだままの娘を膝の上に抱いて、わたしは部屋を見渡す。

壁神様は今日も、黙ってそこにいる。昨夜新たにできてしまったポークチャップの染みは…、うーん。勇が人間として成長する過程に、必要だった痛み of 跡だと思ってあげよう。後でもう一回拭くけど。

「ごめんしゃい」

詩乃の涙は、流したそばから拭き取られ、跡形もなく消えてしまう。それでも今、彼女からあふれる温かい雫のことを、昨夜の暴れて散らかした自分を、なんの形にも残らない複雑な感情を、わたしはずっと忘れないような気がした。

「なんにもないわ、いつもどおりよ。大丈夫」

今日も我が家はキレイ。わたしのおかげで。

今日も、いつもどおり。